



利休は1522年、現在の大府堺市で魚問屋や倉庫業を営む田中與兵衛の子として生まれた。武野紹鷗に茶の湯を学び、織田信長や豊臣秀吉の茶頭として、数々の茶会を主宰。85年には秀吉が開いた宮中の茶会で公家衆に厭された。「利休」の号を勅賜された。

しかし、京の大徳寺山門に置かれた自らの木像が、天皇や秀吉がその足下を通ることになって不敬だと秀吉の怒りを買い、切腹させられたといわれる。小説やドラマなどでは、この前段に、天下人として、茶の湯にも我を押し通そうとする秀吉と、それにこびずに、自らの美意識を貫こうとした芸術家、利休との間に確執があったように描かれるケースが多い。



だが実は、利休は切腹しておらず、九州まで逃げ延びていたという説がある。文教大学の中村修也教授（日本茶道史）が2015年に著書で唱えた。

中村さんによると、利休が木像事件で追放された、切腹させられたという従来説の根拠になっているのは、表千家4代の江岑宗左が1653年に紀州徳川家に提出した「千利休由緒書」。

しかし、その成立は利休の「死」から60年以上経過しているうえ、年代などにも間違いが多々、一次史料としては信頼できないうえ、やはりには「この

ほかの『利休が切腹した』と書かれている史料もすべて後世のもの」だと指摘する。

一方で、「利休のごとであるが、曲事まがことがあり、逐電した（案早く逃げつれた）」（勸修寺晴豊の日記）、「宗易（利休の法名）は逐電したのごと」（西洞院時慶の日記）、「宗易が（略）追放になっていたが、行方知れなくなった」（伊達成実の日記）など、当時の日記には利休に関する記述が散見される。「これも、利休は「逐電した」「行方知れなくなった」とのみ書いており、切腹したとの記載はない」と中村さん。

唯一「成敗された」と記す「北野社家日記」も、「別の盗賊の斬首の話を混同して書いた可能性があり、信用するには無理がある」と中村さんはみる。



これに対し、利休が切腹したとされる1591年より後の史料で、「その時点で利休が生きていたとしか読めないものが複数ある」と中村さんは言う。

第一は、秀吉が母の太政所の侍女に92年5月に送った手紙だ。そこで秀吉は「きのふりきうのちやにて御せん（贈）もあり（昨日は利休の茶を飲んで食事もとつ）」と書く。

また、同年12月の前田玄以宛ての手紙で、秀吉は「ふしみのふしん（普請）の事りきうのませ候て（伏見城の建設のこと）は利休が好むようにデザイン

させて」と記す。「死んだはずの人間に茶をたてさせ、城をデザインさせることは不可能。『利休好みの茶を飲んで』『利休好みに合わせ、他の者にデザインさせて』と解釈するかもしれないが、利休は生き延びたとき考え方が自然」

利休は一体どこにいたのだろう。中村さんは、92年5月の手紙が書かれた場所が、肥前の名護屋城（佐賀県唐津市）だったこと、利休の弟で、後に豊前小倉藩主となる細川三斎が利休の子の道安に豊前国に300石を与えていることなどから、「少なくとも一時期は九州に滞在していたのでは」と推測する。

中村さんによると、追放前の利休は豊臣政権で政治的にも重要な地位を占めており、石田三成ら奉行衆は快く思っていた。

「一次史料には、利休と秀吉が茶の湯を巡って対立したとの記録はない。追放の契機になった大徳寺の木像にしても、寄進の御札に寺が安置したもので利休が責められるのは筋違だし、奉行衆の不満を抑えきれなくなった秀吉が、「利休を切腹させた」というのが本当のところではないか」

追放後の利休の消息はわからないが、「大名の細川家と交流があったことは間違いない」とみる。政争から解放され、静かな晩年を過ごしたと思いたい。

（編集委員・宮代菜一）

読む

「利休は切腹せず、実は生き延びていた」との説を唱えたのが、2015年刊行の『利休切腹 豊臣政権と茶の湯』（中村修也著、洋泉社）。一見とっぴに思えるが、きっちり一次史料を読み解き、導き出された論には説得力がある。現在は品切れのため、図書館か古書店で。

「死後」に茶をたてた記述 ■ 九州へ逃れた説

リスト教のミサの際、イエスの血の象徴であるワインを杯に入れて回し飲みする様子をヒントに、利休が創始した可能性が高いと考える。

当時、堺は国際貿易都市で、宣教師たちが多く訪れ、キリスト教に触れる機会も多かった。さらに、茶入れを拭く際の袱紗ふくしやさばきや茶巾の扱い方なども、聖杯を拭くしぐさなどと酷似しているという。

「キリスト教の所作に酷似」

利休が始めたと言われる茶の湯の作法に、キリスト教の影響が色濃く投影されているとみる説がある。唱えているのは、利休の孫・宗巨の次男だった一翁宗守を祖とする武者小路千家の14代家元・千宗守さんだ。千さんは、一つの茶わんの同じ飲み口から客が茶を回し飲む「濃茶」の作法は、キ